

留学生インターンシップのすすめ

— 国際化の流れの中で急がれるインターンシップ制度の具体的活性化 —



海外交流

古城紀雄*

Expectation of Active Internship Programs for International Students in Japan

Key Words : International Internship, Internship Programs, International Students

1. インターンシッププログラムの
推進が必要となっている背景

我が国で学ぶ留学生の中には、学位取得後に日本で就職したいという者が多く、特にIT関係の留学生は人材的に優秀なこともあり、引っ張りだこになっている。しかし、そうした留学生が会社に入ってすぐに役に立つかという、必ずしもそうではない可能性がある。その意味で留学生に限らず在学中に企業研修等を通したトレーニングを経た後に企業に入ってゆくプロセスが望まれている。

以後、大学生・大学院生が在学中に企業等で研修することをインターンシップと呼んで行く。それが今日日本においても必要となっているのは何と言っても、企業活動が日本の国内だけではなく、世界的観点での展開を余儀なくされていて、そのことを避けて通れない、またそれができない企業は必ずしも将来活発な企業活動を展開できないかも知れないという事情に基づいているからである。

日本の企業の特有の文化であった「会社に入って、かなりの期間の社内教育を受け、結果として先輩を敬い、後輩を育て一生その会社でがんばり通す形」での展開はもうなくなりつつあると認識するのが一般的になった。こんな企業丸抱えの人生ではなく、各個人が自分ができる能力を示して、それに見合う

だけ給料が払われる時代になっていくだろうと判断されている。

そうなる会社に入る前に、インターンとなつてどこかの企業でトレーニングされていない学生は、入社第一日目から給料をもらうに値するだけの仕事ができない状況で大学を卒業することになる。また、企業などとしても、社内教育を最小限にする(時には無くす)流れの中で、学生・院生がどこかで企業研修を経験できる状況をお互いに作らなければならない、従って、その企業自身においてもインターンシッププログラムを広く提供しなければならない、という構図に自然になってゆくことになる。

インターンシップが定着している欧米(特に米国が代表的)では、上述のように学生は就職したその日から(インターンとして培った)能力と能率に応じて給料をもらえるのであり、さらに、学生が大学院に進学せんとする時にはインターンシッププログラムの単位が必要であり、また就職するときにはインターンシップ先の企業からの推薦状が不可欠でかつ極めて重要である環境となっている。

また、同時にインターンシップは次の学期の学費を稼ぎ出すことも目的としておこなわれている。インターンシップを無料とする、しないの問題は日本で時々議論になっているが、理想としているインターンシッププログラムは学生が学生なりのキャリアで会社に貢献をして、そして、そのことでもってしっかりと対価が払われる状況の中で訓練されるものである。勿論、学生に対しては(日本人学生を含めて)「インターンシップで、もし何がしかのアルバイト料等をもらいたいという希望するのであれば、その資格があるかどうかその能力があるかどうかをまず考えなさい」と指導している。

また、米国の企業の場合、インターンシッププログラムを実施するメリットのひとつとしては、希望

* Norio FURUSHIRO
1944年7月12日生
大阪大学大学院工学研究科冶金学専攻修士課程修了
現在、大阪大学留学生センター留学生交流指導部門 兼 大学院工学研究科マテリアル科学専攻、教授、工博、超塑性材料工学
TEL 06-6879-7108(ダイヤルイン)
FAX 同上
E-Mail furusiro@mat.eng.osaka-u.ac.jp



する教育内容を大学に対して要望できることにあるとされている。また、そのメリットとともに、企業が予備実験的或いは予備研究的に何か行ってみたいというプロジェクトとか、あるいは、短期で早く完成させたいといったプロジェクトとかで人をたくさん雇うわけにはいかないけれど、急いでプロジェクトを進めたい時などに、インターンシップ生を組み込むことができる。さらには、直接求人活動をできるということが企業にとって極めて重要な意味をもっている。このリクルート活動についてはそれ自体が目的となることは避けるとしても企業にとってはおおきなメリットである。日本ではインターンシップ中にリクルート活動を決して行ってはいけないという内容の報告書を見ることがあるが、そうであればインターンシップをすることのメリットは半分以下に減少するであろう。

一方、米国大学においては、優秀なインターンシッププログラムを持っているということで、大学として優秀な高校生をリクルートするといった前向きな情宣活動ができることもあり、企業や学生からインターンシッププログラムについて、多様な切り口からの評価を受けてさらにプログラムを改善し得ることも利点と言われている。

もちろん学生にとってはインターンシップに参加することで、自分の専門とはこういうものか、人生の目的をこういうところに置けばいいのかといったことを初めて認識する機会となると言われている。これは教育学部等の学生が教育実習を経験した途端にほとんどが先生になりたいと考えるようになる現象と同様の傾向のようで、理科系、文科系、工学系でもいろいろな分野の自分に適したインターンシッププログラムに参加することで、自分の勉強していることはこういう社会プロセスで自分の努力が実を結んでいくのだということを認識できるという意味で、インターンシッププログラムの意義が強調されている。

しかし、我が国においては一般的にはまだもっぱら社内教育制度による人材育成が中心で、自社に優秀な学生を獲得し、あとは自社に合うように教育する企業がほとんどである。給与面でもなるべくなら長期間の雇用のためにいわゆるグループ化し、年功序列で同期入社する者は15年程は同額給与として処遇する流れがある。我が国ではこうした企業文化を保持して人事・生産を管理してきた面があるが、その

ことはこのインターンシップ推進の考え方とは基本的に矛盾していると言えよう。

2. 日本企業における留学生インターンシッププログラムのメリットとその推進への期待

ところで、今日の国際化時代に通用する新たな企業文化を、今それぞれの企業の中に作っていくためには、あらたな試みが必要であり、中でも国際インターンシッププログラムを通じて積極的に展開していくことが日本企業に求められている。

すなわち、日本人学生をインターンとして企業研修させることは、すでに前述の如く大いに推奨される一方で、日本企業での国際的インターンシッププログラムの推進も大きく期待されている。企業活動がグローバルに展開せざるを得ず、国際化を加速させていく必要があることははっきりしている状況で、外国人をインターンとして受け入れることがそれに効果的であるという面も強調されてきている。

国際インターンシッププログラムの中でも、留学生諸君をリソースとして活用する形での「留学生インターンシッププログラム」の有用性について次に述べたい。

留学生諸君が学位を取得して世の中に出て行く際、単に一度は日本の企業での体験をしたいという観点だけではなく、日本の企業である程度学んで次の国のどこかの会社でそれをキャリアにして飛躍していきたいという願いが最近の留学生に特に強く感じられる。もし、日本の企業に上述の新たな国際化の試みのひとつに、留学生インターンシップの活用も考慮されるのであれば、双方のメリットは倍加しよう。

留学生インターンシップの有用性である理由の第1は「留学生は日本で学んで日本語でのコミュニケーションに問題がない」ことであり、さらには「日本文化をある程度理解できる、理解できている」ことであろう。無理なく国際インターンシップを導入できる点で留学生インターンシップは企業にとっても有用であるに違いない。また、留学生の中にはインターンシップをした企業に正式入社する場合もある。さらには、博士論文とか修士論文の題目にもよるが、各会社が進めたいと思っているプロジェクトに対してピッタリの人材で、まだ若い留学生がいたとすれば、その人が短期的プロジェクトに大きく貢献するであろうということは間違いない。

併せて、留学生への機会提供に限らず国際的イン

ターンシップは、会社の中で通常の日本人社員が外国人と接することによって否応なしに自分たちとは違った文化、考え方をもつ人たちと一緒に仕事をしていかなければならない中で日本人社員の国際感覚を醸成することが自然にできてゆくということを強調しておきたい。

なおかつ留学生といえども日本の大学の卒業生のひとりひとりであるということであり、それゆえに例えば大阪大学でたまたま学ぶ留学生の諸君が日本人の阪大生と同じようにしっかり研究し、しっかりとした論文を書いた卒業生としてこれから国際的に本当に活躍していけるような状況ができることを願っている。

そういう意味では、世界各国で学ぶ留学生たちが、普通にインターンシッププログラムに参加した上で、社会に巣立つのに対して、日本ではそういうチャンスをもちにくい状況で卒業していてもなかなか国際的に通用しない可能性があるのでは無いかと懸念もあり、日本人・留学生を問わず、全てを対象としたインターンシップ、とりわけ留学生インターンシップの推進に対する協力を願うものである。

留学生諸君にとっても日本の企業活動の現状を学

習できるのはメリットとしてあるのはもちろんであるが、その企業が当該留学生の母国への進出の際に実際の働き手となってその国に定着していくような形で主役を演じていく可能性があり、その意味でも待望されるプログラムと考えられる。

国際インターンシップを進めるに当たっては、日本人と外国人とがお互いに異なる人生目標、人生観をもっていることを直接に理解できるいいチャンスだということを強調しなければならない。勿論、留学生諸君においてもインターンシッププログラムが本当に有用であるかないかは彼らの側の努力にもかかっている。留学生諸君の能力を引き出し、評価して、留学生インターンの受入れの企業がどんどん出てくるような能力の磨き方をしてほしいとも念じている。

(本稿は、近畿経済産業局通商部国際事業課の主催で平成13年5月29日に開催された「留学生と企業との交流会」で筆者が行った基調講演「留学生インターンシップの推進について」の講演内容をもとに作成された)

